

シンポジウム 古代山城鞠智城を考える

シンポジスト

小田富士雄氏

福岡大学名誉教授

岡田茂弘氏

国立歴史民俗博物館名誉教授

板楠和子氏

九州ルーテル学院大学教授

出宮徳尚氏

岡山市教育委員会文化財課長

大田幸博氏

歴史公園鞠智城・温故創生館長

コーディネーター

矢加部和幸氏

熊本日々新聞社編集委員

矢加部 これまでのお話で北部九州あるいは西日本、東日本のその当時の古代山城の様子、あるいは社会の様子などが文献史学からも非常によく分かりました。本日の講師のみなさんと若干討論をしてみたいと思います。題は「古代山城鞠智城の謎に迫る」です。

実は、私が鞠智城の取材をしたのは平成三年度、八角形の建物が出たころでした。そのころから鞠智城に来るたびに「なぜ、こんなところにこんな大きな城を造つたんだろう」と思いました。先ほど西日本の古代山城の話もありましたが、もし朝鮮半島での戦争の後の防御と考えれば、北部九州から瀬戸内海に行くルートを防御地帯として守らなければいけない。しかし、鞠智城はそれから考えますと、ずいぶん南にあります。なぜこんなところにこれだけの古代山城を造らなければならなかつたのかという素朴な疑問がずっとありました。

大田先生が『熊本歴史叢書』という本のなかで鞠智城の謎を三つ挙げていらっしゃいます。その中の一つが地理的な条件です。大宰府から南に約八十キロも離れたところになぜこんなに大掛かりな城を造つたのか。第二点目が、その位置づけと言いますか、役割をどう考えるか。築城に関する文献的な記録がないのが三つ目です。この三つを挙げておられます。この三つのうち、地理的にこれほど南に造つた謎に迫つてみたいと思います。まずは、問題提起として大田先生からお願ひします。

大田 鞠智城の立地の特異性と築城年月日がはつきりしないとか、あるいはほかの山城と違つた立地条件、山ではなくて丘陵であるとかいろんなところから鞠智城の特異性が指摘されています。特に土壘の造りが列石を伴う版

矢加部和幸氏



築ではなくて、山の尾根の地山の削り出しというふうな言い方をしてきたわけですけれども、近年の発掘では列石を伴う版築土壘が見つかって、意外とオーソドックスな古代山城だと分かつてきたわけです。

謎という部分に関して地理的、位置的な問題があつて、六六三年の白村江の敗戦、それ以前からあつたのではないかという見方が一番妥当ではあるわけです。そういう城が国家の非常時に城柵に変えられて、軍事施設に変化して古代山城に組み込まれたという考え方があつたのです。しかし、考古学的な所見からすると、それは証明できません。鞠智城の敷地は六世紀後半までは竪穴住居があり、出土遺物はほとんど七世紀の半ばから後半のものです。鞠智城の修理時期、あるいは築城時期に見合った遺物ができます。すると、また元の鞘に戻ってしまうというような感じで、今、現場サイドとしては「北九州の周辺部」というような位置づけをした軍事基地だという見方をしております。ただ、板楠先生のおっしゃった木簡についても、文書木簡は一本出ただけで二号木簡には文字がありません。たくさん出るだろうと思っていたのが、出ないという現実もあり、なかなか難しい問題があります。これに関しては、謎が解けないというのが現状です。

矢加部 北九州の周辺の基地と？

大田 まあ、そういった感じですね。

矢加部 分かりやすく言えば兵站基地みたいなものですか？
（へいたん）

大田 正しいかどうかは分かりませんが、それが一番、「見合」見解だらうと思つています。

矢加部 分かりました。小田先生にお尋ねします。以前に先生が「押し出しの城」とおっしゃった

ことを覚えているのですが、「押し出しの城」とはどんな意味でしょうか。

小田

鞠智城の場合は、肥後のなかだけで考えると「こんな内陸部に」とか言われるのですが、大宰府を中心にして考えた時には、「こんな内陸部になぜ?」というのは、私はあまり合致しないのではないかと思います。それから大野城、基肄城の場合と鞠智城の場合は立地環境が違います。どちらかというと、鞠智城は少し低い所にあります。大野城、基肄城はまさに「逃げ込み城」というのにうつてつけのようなどころです。

もう一つは、鞠智城の史跡指定の範囲になつているところですが、あれはかつて内城であつて、もう一つ外回りに外城があるのだというような説もあり、これも一理あるわけです。さらには筑後のほうに通じる古代の官道がこの近くを通つており、いろんな条件があります。もし大宰府の方まで攻め込んでこられるような状況になつた時に、やはり鞠智城から



古代山城鞠智城について活発な意見が交わされた

も援兵、援軍が送られるようなどもあると言えるでしょう。特に鞠智城のような構造のところは守る面と攻める面、すなわち出て行く面と両方あるのではないか。これは出宮さんの話にもかかわってくるかと思います。特に百濟の山城を研究している先生方からもそういう意見が出ているところです。それに対して大野城と基肄城の場合は、守るという面がウエイトを持つてくるでしょう。そこから攻めて出るというのはあまり考えられないでしょう。

もう一つは、もし守るとなれば、先ほど言つたかつての「外城説」というのは、現在まつたく考えなくていいのかということがあります。外城説をとった場合は、今回の指定になつている範囲の外側で、かなり水田なども取り込める範囲です。そういう面からいくと、私は外城説という考え方もまだ捨てがたい。これから考古学的な調査でもそのあたりを考えていく必要があるのではないかと思っています。

矢加部 分かりました。岡田先生におうかがいします。東北の城と西日本の城と比較するというのはなかなか難しいと思うのですが、先生は鞠智城の位置をどういうふうにご覧になつていますか。

岡田 十年ほど前に熊本市内で城柵をテーマにした研究会があり、その時に呼ばれて来たのですが、「初期山城の再照明」でしたか、そういうタイトルでした。一つは本当に六六三年の白村江の戦いの直後にできたのかどうか。これは文献的にはないわけです。そのころはまだ遺物のほうの年代がはつきりしていませんでした。その段階では、ひょっとすると文武二年以前のある段階でできたと、そうすると遅いのかもしれない。白村江の戦いの直後の防衛のために造つたのでない可能性があるのでないかとしました。これは今、小田先生が言られたような攻めていくほう、つまり前進基地の拠点と

しての意味があるのではないかと。それは東北の城柵がそういう意味を持つており、だから政庁があると思います。ここにも政庁があるのでないかという発言をした記憶があります。

まだ確認はされていませんが、どうも政庁らしいものがあるということで、米原地区のすぐ近くで
であるかという部分はあります。これも間違いのない事実だと思います。あれがどう
であるかという遣構の一部が発掘されています。配置から言えば、あれは郡家の政庁に匹敵します。ふ
つう郡家の政庁は五十メートル×六十メートルぐらいの比較的小さなものなのです。ただあれは、今
の研修棟のすぐ横ですが、はるかにそれより広い。そういう広いものは東北では郡山遺跡で一期官衙
といつているものがまさにそれに当たるもので、百二十メートル×九十メートルあります。これは、
私は郡家であると同時に国府の政庁でもあるという二面性を持つていたのだろうと考えています。そ
ういうものが鞠智城のなかにあるかもしれない。そうすると、だれを何を対象とするかで、ここから
隼人まで出て行くのか、あるいは熊襲を対象にしたような形でこれは造られたのかという問題も実は
出てくるだらうと思います。文献史料から言いますと、西海道ではいずれも対象になつてているのは隼
人だけです。ただ文献の解釈などではほとんどが九世紀の解釈ですから、八世紀の初頭の段階ではど
うだったのか、あるいは七世紀の段階ではどうだったのかと考えると、ひょっとすると違うのかもし
れない。その違いが立地の違いとして出てきている可能性があります。これは出宮さんの今日の資料
を拝見していても、どちらかというと鞠智城は瀬戸内海の山城的な色彩を、神籠石的な色彩を持つ
いますから、比較的、中が平らです。大野城などは高い所にあり、三角形をしているということから

考えると、断面をとりますと、ちょっと性格が違うのかもしれないなという気がします。だから年代は同じでも少し性格が違うのかもしれないという可能性はまだあるのではないかと思います。

矢加部 分かりました。出宮さんにお尋ねします。今、岡田先生からご指摘があつたちょっと瀬戸内海の城と近いのではないかというお考えも含めて、鞠智城がなぜこんなに南に造られたかのどうか。ご意見をお聞かせください。

出宮 先ほどの私の持ち時間では鞠智城にほとんど触れることができませんでした。独断と偏見を申し上げますと、私は先ほど申しましたように戦国の城塞、城跡をよく見ていて、それから見ていきますと鞠智城は「山城」ではないのですね。「平山城」というものに当たる。戦国時代の城の区分はご存知のように「平城」と「山城」と「平山城」というのがあります。「平山城」はご存知のように、もう一つ「平山城」というのがあります。「平山城」というのは、熊本城もたぶんそうだと思うのですけど、コアになる城郭部分と城下の部分が平地にある。ですから「平城」と「山城」が一体になつてているという意味で「平山城」という呼び方をします。近世の城郭はほとんどそうです。それに対して、同じ字を書きながら「平山城」はつまり台地の上にある城。この近くで有名なのは「荒城の月」の岡城ですね。のような山の上に城下町を造るという、そういうパターンがあるわけです。それから見ていきますと鞠智城はまさに「平山城」です。戦国時代、近世の城郭の概念を持ち込んでいいかどうか、議論があるのでけれど、城そのものと同時に行政機能も城のなかに取り込んでいます。近世城郭のようにお城と城下町を別々にしているというのではなくて、領地のなかへ戦闘機能も行政機能も取り込んでいるのではないかと考えます。だから、城地を

選んでいるという観点を持つております。

それからもう一点、これは特に北九州の古代山城の契機になつた白村江の戦いをどう評価するかという問題があります。私は考古学が専門ですので、文献のほうはちょっと問題があると思います。先ほど言われました防人ですが、私はこれは増援の部隊ではなくて、地元の豪族の離反を抑える警察機能的な、憲兵というのでしょうか、そういう役割を持つた人たちだと思います。なぜかと言いますと、唐が九州にやつてきた時に、筑紫の国が占領されるとします。唐には安東都護府のように、唐の地方政府は都護府というのがあり、その下が都督府という行政単位があります。筑紫が占領され、筑紫の国に地方政府が置かれる場合、当然筑紫の都護府になるわけです。そういうものが行われるのを排除するというか、防止するためには、というのは唐の行政官、行政庁が北九州に及んだ場合、地元の人々が唐の下級官僚になるわけですから、それを排除するためには警察機



2階席まで埋まった聴衆（菊鹿町グリーンパレス）

構なり、むしろ地元を抑える軍事基地も当然必要になります。

ということで、鞠智城はむしろ熊本平野、火の国の大半を占める、特に呪術性の強い葦北の国造とか、そういう中国との関連あるいは朝鮮半島との関連の場合、むしろ熊本平野の豪族を抑えるための軍政および民政の拠点ではないかと思います。というのが、さつき言いました六六三年の敗戦をどう評価するか、文献の研究者と私たちは評価が違うのですけれど、軍船四百隻が焼かれるという、こういう表現がいいかどうか分かりませんが、太平洋戦争でいうとミッドウェーとマリアナ海戦をいつぺんにやられたような、国家存亡の危機の状態なのですよね。しかも迎撃態勢を組みようがないと。そういうなかで国内の締め付け、どうやって天智政権が自己の政権を維持していくかという命題のなかで、鞠智城は再利用というのか、デフォルメというか、改装を受けて城跡になつたと思います。

非常に大風呂敷を広げますと実は、私は吉備（岡山県）にいますが、吉備は文献のほうで言いますと「大宰」と言います。古代で大宰が置かれたのは吉備と大宰府の二つだけです、吉備の大宰といふのはあまり有名ではありませんが、吉備を近津大宰とした場合、大宰府の元になる那の官家であるとか博多一帯のものが中津大宰となると、そのもう一つ先に外津大宰があると非常に都合がいいわけです。そうすると、やはりこれはまったく文献に出てきていませんので架空の話になりますが、火の国をどうやって抑えるかという時に、その前身になる形の鞠智城のプロトタイプ、元になる形の軍事と民政とをセット関係で伴う、そういう施設があつてもおかしくないという観点も持っています。まったく論証のない思いつきの話をして申し訳ありません。

矢加部

鞠智城の場所の謎といいますか、いわゆる（対）唐軍の防御ラインからかなり離れたどこ

ろにあるという場所の謎についていくつかご意見いただきました。こう見てくると、鞠智城の場所は、その当時でもたぶん日本のかなり僻地であつたと思ひます。こういう辺鄙な土地でも国際情勢のなかできちんと位置づけられていろんな施設が造られていたのだというのが、諸説があるようですが、なんとなく分かるような気がします。

最後に各先生方に今後の鞠智城の調査のあり方とか、あるいは整備の仕方とか、国指定シンポジウムですので、そういう提言をいただいてまとめたいと思います。小田先生からお願ひいたします。

小田 今、鞠智城の成立についていろんな説が出てきました。今後の整備は視点をどこに置くのかという議論になるので、今のような全然違つた説が出でますと、本当はもっと議論を深めないといけません。それによつて整備の視点が違つてくると思います。

それはそれとして、一応現状でこれまでやつてゐる大野城や基肄城、それから金田城あたりの整備から見ますと、最近の整備は、一つはみなさんにどんどん鞠智城に来てもらわないといけないという視点が一方にあるわけです。大きな予算をかけるわけですから、どう活用していくかという問題があります。ですから活用の仕方については、やはり地元の人たちからどういう希望が出てくるか、そういうものも飲み込みながらやつていく活用の視点がいると思います。

ただ国指定の史跡になりますから、どんなことでもしていいというわけではありません。史跡指定という枠のなかで、どういう形で活用していくかをもつと地元できちんと詰めていく必要があると思います。それからもう一つは整備に当たつて学術的な調査成果に重点をおいて、それに則つてやらないと、旧石器捏造のようなことを言われます。「どのあたりまで作つて大丈夫なのか」という、建築学

の専門家などのご意見もうかがわないと伺せんし、学問的な視点に立った史跡の整備という両輪が必要なのではないかと思います。

矢加部 確かに先生がおっしゃるようにいろんな施設が今できています。しかし、鞠智城も今後、さらに発掘調査が進むと思われます。岡田先生は、東北で取り組まれた結果からどう思われますでしょうか。

岡田 鞠智城では史跡の指定の前に、三層の鼓樓あざくらだとか校倉あやべらだとか、かなり復元的な整備が行われています。それから平面表示の整備も行われています。ですから、モノを見せる、遺構を見せるという点ではかなりのことをやっておられると思います。ただ、現在調査中でもありますが、いつたい鞠智城はどの範囲なのかという問題もあります。例えば、城ですから門から以外は入れないはずです。どこからでも入れるのなら城の意味はないですから。では、城門はどうなのか、あるいは外部施設はどうなっていたのか。これらについては調査に基づいて整備をしていく必要があるかと思います。それから先ほど申し上げた政序らしきものについては、本当にそうなのかという疑問もあります。

ただ、そういう整備は今後、調査に基いて行われていくとは思うのですが、それはハードウエアの整備です。もう一つソフトウエアの整備といいますか、文化財の保護というのは保存と活用であると規定されていますが、保存は現在やられていますが、活用をどうするかという問題があります。この遺跡をどう扱うか、まだ性格については今日も結論がでませんでした。しかし、活用を考えれば結論が出てから活用するのではなく、いろいろな説を理解していただいて、「私はこう思う」ということで活用できると思います。

例を挙げますと、邪馬台国ですが、邪馬台国はいまだに場所が決まっていません。邪馬台国があつた地域が分からぬから教科書でも教えられないかといったら、決してそんなことはないわけで、教科書でも教えています。あれは分かつてないのだから教えてはいけないと文部科学省も言わないはずです。同じように、鞠智城という遺跡があるのは確かで、国の指定史跡にもなつていて。これをどう考えるかは、実は学者以外に、もちろん学者も考えますが、鞠智城の近くに住んでおられる方、あるいは熊本県内におられる方が、「私はこう思うよ」と、もちろんただの思いつきではダメで、どういう理由でそう思うのかを発言される、あるいは考えてほしいのです。そういうことで鞠智城の研究がさらには進むのだろうと思います。

それからもう一つ、私は、多賀城ではかつて地区公民館で公民館長さんから頼まれて、まだまつたく整備をしてないころに月一回、夜に多賀城研究所の調査員が交代で出て、多賀城について、あるいは東北の古代史について話をしました。当時六人の所員でしたから、年に二回分担すればできるわけです。それが二年ぐらい続いた時に、「宣伝もしなければならない」というわけで地元新聞社や放送局にお願いして、新聞とラジオでの取り組みを取材してもらいました。その後、多賀城に博物館ができたので博物館では、現地説明会、現地案内を当初は解説員がやつていました。現在では、地元の方々が観光ボランティアと史跡案内サークルという二つのサークルを組織され、それぞれのサークルが史跡の案内、観光客などの案内を実施しております。そういう状態になりましたので、現在、東北歴史博物館では、専門家による「多賀城巡り」をやっています。これはまさに発掘をやっていた人たちが案内をする。その時には自分たちが掘っていたものですから、ボランティアの方の説明とは少し

違った説明がおのずとできるわけです。同時に、多賀城を中心とする古代の東北の遺跡などについて館長講座をやっています。鞠智城では大田館長が館長講座を実施されて、大変好評だと聞いています。やはり、そういうソフトが必要なのです。その講座で説明をお聞きになつた方は、自分が聞いて「ああ、勉強になつたな」と思うだけではなくて、「そうだな」と思つたら、明日は外部からおいでになつた方々に対して先生になつてください。今日は生徒でも、明日は先生になれるというのが生涯学習だと思います。ですから、史跡は生涯学習の場として、みなさんに大いに活用していただきたいとお願いして終わります。

矢加部 板楠先生には先ほど出ました、いわゆる文献と発掘調査の結果から見て今後の発掘調査の視点について一言お願ひできればと思います。

板楠

日本史研究において、もともと古代史関係は文献史料が少ない分野です。今、一番知りたい地元にある鞠智城についての直接的な史料といつても、ほんとに数篇しかないのです。その史料をいかに当時の歴史的な状況のなかで読むのか、そういう基本的な作業に興味がある方がいらっしゃれば、ご一緒に解説作業をやりたいと思つています。また、今後の発掘調査で一番期待しているのは、やはり新たな木簡の発見です。特にこういう軍事的な施設については、記録がないのが当然だと思いますが、ここで使われていたさまざまな事務書類が、もし木簡として残存しているようなことがあれば、その時こそ鞠智城の文献研究の第一歩が始まるのではないかと期待しています。そういう地道な発掘調査や研究会に、参加させていただければありがたいと思っています。

矢加部 出宮先生には同じような視点ですが、発掘調査や研究に期待するもの、と同時に整備に関

して何かアドバイスいただければと思います。

出宮 本業の文化財課長に戻つて発言せよといふ要望です。私も岡山市にあります大廻小廻山城跡の史跡指定について磯村主任調査官の指導を受けながら、指定の申請に向けて取り組んでいます。数年前、岡山城跡の史跡指定を図つたという経緯からも、指定について、平成十六年一月に鞠智城に寄せてもらつた時に指定の範囲が城壁の上端のラインのこところにあつたように記憶しております。これ、もし間違ついたらお許しいただきたいと思います。岡山の場合、鬼ノ城であるとか、大廻小廻城跡は全部山裾、要するに城壁を含んだ下端の線までを遺構の、城跡の範囲と考えて現在指定に向けて努力しております。もし、鞠智城が城跡を含む地籍が未指定があるのであれば、やはりそれは地域の皆様方のご支援をいただきて城跡全部を史跡指定にするべきです。追加指定の手続きになりますが、これに向けて、地元のコンセンサスを図つていく必要があるのではないかと思います。

それから、もう一点、調査と整備は古代の山城でいわゆる三點セットではありませんが、ぜひ出しておかないといけない遺構が、実は鞠智城で出てないわけです。これは水門です。水門遺構がまだ見つかっていません。大田さんにはつぱをかけていますが、想定地を狙い撃ちして、史跡整備との関連のなかでも当然これは解決しないといけない問題ですので、ぜひ水門遺構を発掘していただきたいと、いう期待を持っています。

最後に、先ほど岡田先生の言われたことの延長ですが、やはり遺跡を守り、あるいは活用するのは行政だけがやるのではなくて、地元の方々が参画し、あるいは地元の方々が主導権を持つて進めるのが一番大切です。「保存会」、あるいは「友の会」という組織がいいのか分かりませんが、岡山市には

古く戦前から保護探彰会、歩行会とかいうちょっと時代がかつた名称の団体があります。史跡を守る、活用する、あるいは整備する、それから普及啓発する地元の団体・組織ができるところもあります。やはり鞠智城にも、行政サイドと二人三脚でこの城跡を守り発展させる組織が必要でしょう。それが私の鞠智城に対する望みです。もし、すでになつたらごめんなさい。私の勉強不足で知らなかつたことでお許しいただきたいと思います。

矢加部 今後の鞠智城の調査研究に、あるいは整備に関する課題、方向性などをご提言いただきましたけれども、これを受けてこれからどう進めていくか、大田館長にお話をお願いします。

大田 先生方のご質問を踏まえて、私の考え方を述べたいと思います。まず、ほかの古代山城と横並びで、あまり突出した整備はしないほうがいいのではないかという意見もありました。まさにその通りで、この件に関しては、この言葉を非常に重く受け止めたいと思っております。鞠智城の性格については、私たちの基本的な概念というのは、小田先生から以前、二示唆を賜りましたけれども、「六国史」に載っている古代山城の定義からすると、これはまさしく古代山城は、東アジアの國際情勢に伴う緊迫感のなかの城塞という位置づけで、軍事施設です。そういうたたベースを持ちながら、そこから枝葉部分で政庁的な役割を持つたのだと思います。あるいはまた、隼人対策、南部対策の意味での枝葉の部分を、そこから延ばしていくたほうがいいというようなアドバイスを受けましたので、それを基本的な理念として今、調査、整備をやっているわけです。それから遅ればせながら、城門、土塁の調査も始まり、これから長く取り組んでいこうと思っています。平成六年度から鞠智城跡の用地買収が始まり、整備を行っていますが、ややもすると調査が整備に遅れてるような部分がありました。平

成十六年度の国指定を契機として、本来の姿に戻し、調査を先行しながら整備を進めていく予定です。特に土墨線にあたり（鞠智城跡保存整備検討）委員会からも指摘が出ているように、調査後の整備ということを、今、思っているわけです。

出富さんがおっしゃった土墨線の問題は、シャカンドンで一ヵ所だけ山の線で止まっています。これについては後日、追加指定の方向で考えています。また、菊鹿町の郷土史講座を行い、その受講生の方々がボランティアとして活動されており、かなり幅広い活動をされています。官民一体の保存・活用は、なされているのではなかろうかと思います。温故創生館は開館十一ヵ月目で来館者十万人を突破しました。年間集客数に関しては成功していると思っています。本日は各先生方の貴重なご意見をいただき、鞠智城の整備と調査について今後も気持ちを引き締めて一層の努力をしていきたいと思っております。

矢加部 鞠智城は発掘調査がさらに進むと、新しい事実や発見が相次ぐと思います。少しづつ真相が分かるにつれて古代鞠智城の謎もまた明らかになることを期待して、このシンポジウムを終わりたいと思います。本日はありがとうございました。